

伊勢神宮を柱とした地域経済発展の歴史と展望
—門前町から観光地へ—
調査報告書

経済学部・専門ゼミナールⅠ・Ⅱ（大瀧）

2023年11月18日実施

伊勢 FW レポート

宮瀬 鈴木 成瀬 田中

1 はじめに

伊勢神宮は古くから多くの参拝客で賑わい、現在でも多くの人が訪れる観光地にもなっている。特に、内宮周辺には、宇治橋の横から広がる「おはらい町」や「おかげ横丁」がある。今回は、それらの観光資源について取り上げる。

2 「おはらい町」と「おかげ横丁」の違い

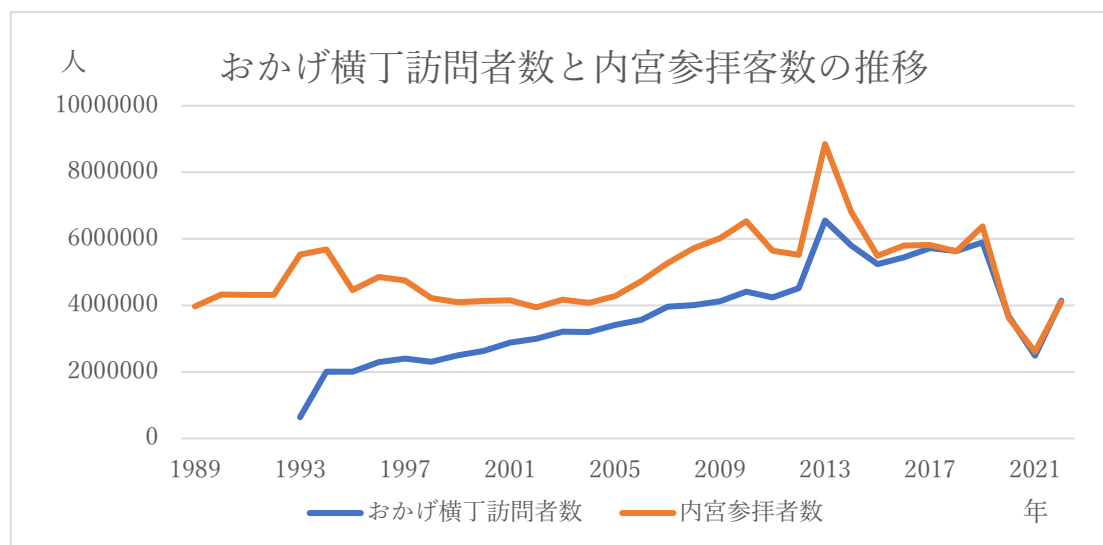
「おはらい町」と「おかげ横丁」の違いだが、おはらい町は、宇治橋から続く約 800 メートルの鳥居前町で、昔ながらの風情の建物が立ち並び、そこで土産物店や飲食店が営業しており、ここには明治時代初期まで「御師」と呼ばれる下級神官の館が立ち並んでいた。御師は、各地を巡り伊勢神宮への参拝を勧誘し、また、参拝者には案内を行ったり、宿の提供を行ったりしていた。さらに、庶民へのお祓いや神楽も行っており、お祓いする館が立ち並んでいたことから、おはらい町という呼称になったと言われている。

3 おかげ横丁の観光業の歴史

おかげ横丁はこのおはらい町の中ほどに入口があるエリア。第 61 回神宮式年遷宮の年の 1993 年に開業した。そもそもおかげ横丁の「おかげ」とは、居住地の氏神様や神社にお願いしたことが伊勢神宮に届いて願いがかなったお礼参りに伊勢神宮へ向かうことをいう「おかげ参り」が由来となっており、江戸時代の人々があこがれたおかげ参りの雰囲気を感じられる。近世まで伊勢参宮は徒歩が基本であったが、明治以降の近代化に伴う鉄道の普及は参宮参拝は早く便利なものにした。モータリゼーションが発達するまでは鉄道での参宮が一般化した。明治時代以降、御師制度が廃止されたことや自動車での参拝客が増加したことなどから、おはらい町へ訪れる観光客が減少しており、昭和 50～60 年代では年間約 20 万人程度とコロナ禍前よりも 30 分の 1 ほどだった。この状況を危惧した株式会社赤福が中心となる住民有志が、1979 年に魅力あるまちづくりに向けた委員会を設置。地元住民の活動を受けて、伊勢市も条例や基金、保全計画を策定し、「伊勢市まちなみ保全事業」を実施した。県もハード整備を実施し、まちづくりに協力した。この整備の起爆剤として赤福が、「おはらい町」に伊勢路の伝統的な街並みを再現しようと開発を行ったのが、おかげ横丁である。おかげ横丁の建物は、伝統的な日本家屋の屋根形状である瓦の切妻屋根と、「妻入り」の建築形式が基本となっている。神宮の正殿は、入り口が平側の「平入り」であり、同じ形状では恐れ多いという思いがあり、妻入りが普及したといわれている。中では、伊勢での暮らしや文化を体感できる施設があり、また、電線の地中化や石畳の舗装を実施し、昔



ながらの景観を再現している。2019年には、590万人が訪れる観光地となった。



令和4年伊勢市観光統計より作成

4 観光業としての発展

全国各地に規模の大きな有名な神社仏閣は数多く存在しているが、参拝自体は混雑していない限りそこまで時間がかかるものではなく、伊勢神宮でもモータリゼーションが発達したころには、自家用車で訪れた観光客はおはらい町を素通りし、内宮参拝後、鳥羽や志摩方面へすぐに向かうことが多くなり、「日本一滞在時間が短い観光地」と不名誉な称号がつけられるほど衰退していたという。ここから数百万人ももの観光客が訪れる観光地に成長できたのは、地域と自治体が一体となって開発に取り組んだ点が大きいと考える。古風の建物自体のみならず、住民や企業の協力である程度可能な部分があると思うが、昔の街並みを再現するには、石畳の舗装や無電柱化などは自治体の協力が必要になると思われる。1979年に地元住民がおはらい町再生に向け「内宮門前町再開発委員会」を結成。委員会と専門家で調査を実施し、82年には「内宮門前町街並み保存」に関する要望書が伊勢市と市議会に提出され、86年に市議会で請願が採択された。そして89年に「伊勢市まちなみ保存条例」が制定された。翌年には、「内宮おはらい町まちなみ保全地区並びに同保全計画」が告示、市民、企業、行政による「まちなみ保全事業」がスタートした。また、その後の景観保護も自治体主導だから成り立つ面が大きいと思う。一度実現して終わりではなく、将来にわたり残していくことが重要だが、行政が主導となって景観の調和を誘導しており、市民だけでなく、行政も協力や支援を実施して三者が一体となって共同で取り組んでいることで、景観が保護されたままおはらい町に再び活気が戻ってきたのでは、と考える。

しかし、ただ景観を保護するだけでは、他の観光地でもみられる。ここまでおはらい町やおかげ横丁が成長したのは、他の観光地にはないものがあると思われる。おかげ横丁では、入口付近に「神恩感謝」と書かれた大きなのぼりがある。これは、謙虚な気持ちで今あるものをありがたいと感謝する意味があり、おかげ横丁の基本精神として定められている。伊勢

では、おかげ参りのお客様を心からおもてなしすることが美德であると考えられ、見返りを求めないサービスである「施行」を行えば、自分たちも幸せになると考える歴史があり、今にも受け継がれている。神恩感謝の精神を表現している「神恩太鼓」や射的などの出店での盛り上がりや文化の伝承を実際にみていると、どこか懐かしい雰囲気や温かさを感じた。それもあり、観光客の満足感もあり、ここまでの発展を遂げたのではと考える。実際に、観光施設の満足度は9割を超えており、リピーターも多く存在している。

5 鉄道の敷設

近世までの伊勢参宮は徒歩が基本であったが、明治以降の近代化に伴う鉄道の普及は、参宮参拝を早く便利なものにした。そして戦後の行動経済成長とともにモータリゼーションが発達するまでは鉄道の参宮が一般的であった。わが国の鉄道の歴史は、明治5年の新橋～横浜間開業に始まり、その後も官設・私設を問わず鉄道網は整備され、伊勢参宮のための鉄道開通が求められたが、幹線から遠く離れていることや、伊勢街道沿いで参宮者相手に生業をしている人々の反対により、許可が下りなかった。そのような中、神宮徴古館の創設にも深く関わった「神苑会」の幹事・太田小三郎らの尽力により神都・伊勢への鉄道開通の重要性が理解され、明治23年に参宮鉄道が設立され、直通運転が開始された。参宮鉄道の開通により、参宮のスタイルは大きく変改していく。かつては徒歩で片道五日を要したが、日帰りさえも可能になり、伊勢参りが身近なものとなった。しかし、高度経済成長に入ると自動車の普及に伴い伊勢参りの主な交通手段は自動車に代わり、バスによる団体旅行の増加も鉄道利用の減少に追い打ちをかけていった。

6 今後の課題

今後の課題として、オーバーツーリズム問題があると思われる。今回のFWで実際におはらい町やおかげ横丁を歩いてみると、道いっぱい大勢の人が広がっており、南北に歩く人もいれば、店舗の前で列を作っていたり、路面店の前で購入したものを立ち止まって食べたりしており、かつての賑わいがおはらい町に戻ってきたものの、人波をかき分けて歩く場面もあり、歩きにくさを感じた。土日祝日はおはらい町も車両通行止めになっているが、内宮側中心に人の流れが止まらず、おかげ横丁の入口周辺の混雑も激しいと感じた。逆にそこを超えた北側まで来ると、人の流れが少なくなり歩きやすくなる。参拝する前に、北側から入って南の内宮側へ抜ける流れや、内宮の参拝を終えて南側から進入する際に、おかげ横丁や赤福本店などで折り返さず、そのまま北側へ抜ける人の流れを構築できれば、観光客数を減らすことなく、今よりもスムーズに歩けるのでは、と思う。また、ごみのポイ捨て問題も観光地では見られ、おかげ横丁でもごみ箱をあまり見かけず、道に少しだが捨てられているごみがあった。

7 まとめ

今でこそ、伊勢神宮やおかげ横丁は日本を代表する観光名所として名前が上がるほどまでに有名になったが、その背景には鉄道の開通があり、これにより伊勢参りが身近に感じられるようになったことであることが分かった。しかし、自動車の普及により約20万人までに

減ってしまったが、それを解決するために立ち上がったのが地元住民ということを知り、当時からおかげ横丁は愛されており、それが現在までに続いており、再び在りし日の賑わいを復活させようと取り組んだ人々の頑張りが感じられた。地元住民の活動により観光者数は増加したが、オーバーツーリズムが発生してしまった。オーバーツーリズム問題は私たち観光客が訪れた観光地の環境や文化を尊重することが重要であり、観光客の行動次第でより良い観光地になる。そういった心がけを全観光客が持つ必要がある。以前は伊勢神宮のお膝元としておかげ横丁に足を運ぶという状況であったが、今ではおかげ横丁目当てに足を運ぶ人がおり、今後もそういった人は増えていくだろう。

・参考文献

・おかげ横丁「おほらい町とおかげ横丁」 <https://okageyokocho.com/main/bunka/oharai/>

・住民が共に育てる観光まちづくり事例 <https://www.mlit.go.jp/common/000213053.pdf>

マルコメ発酵美食「もう一度、伊勢を心の故郷に！お伊勢参りの歴史とおほらい町再生物語」
https://www.marukome.co.jp/marukome_omiso/hakkoubishoku/20220714/16332/

・伊勢市「令和4年 伊勢市観光統計」

https://www.city.ise.mie.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/002/851/r4tohkei_s hin.pdf

・NPO 法人 電線のない街づくり支援ネットワーク『電柱のないまちづくり』学芸出版社
2010年

・伊勢市「令和4（2022）年伊勢市観光客実態調査報告書 概要版」

https://www.city.ise.mie.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/002/855/r4kekka.pdf

・参宮館 伊勢参宮と鉄道 [https://www.sengukan.jp/wp/wp-](https://www.sengukan.jp/wp/wp-content/themes/sengukan/media/pdf/record/h28/20170424-zuroku.pdf)

[content/themes/sengukan/media/pdf/record/h28/20170424-zuroku.pdf](https://www.sengukan.jp/wp/wp-content/themes/sengukan/media/pdf/record/h28/20170424-zuroku.pdf)

最終閲覧日 2023年11月22日

伊勢神宮と交通の進化

210321133 出川巧

220322036 黒田亮介

220321017 伊藤壮一郎

210321060 神谷俊輝

はじめに

今、伊勢神宮と聞くと観光地としてとても人気だが、昔は観光よりも参拝を目的とした場所であったと耳にした。そこで伊勢神宮に行くということが、観光という意味合いが強くなるにつれて周辺の交通に大きな影響を与えたと考え、調べてみることにした。

1 昔の伊勢神宮参拝

江戸時代、伊勢神宮への参拝はお蔭参りや、抜け参りと呼ばれていた。お蔭参りとは、江戸時代に起こった伊勢神宮への集団参詣のことだ。数百万人規模のものが、およそ60年周期に3回起こった。お蔭参りは奉公人などが主人に無断で、または子どもが親に無断で参詣した。しかし、伊勢神宮への参拝は良いこととされていたため、帰ってからもとがめられることはなかった。これが、お蔭参りが抜け参りとも呼ばれるゆえんでもある。

また、お蔭参りは歩いて伊勢神宮を目指すので食事代や宿泊費などお金がかかるが、大金を持たなくても信心の旅ということで沿道の施しを受けることができた時期でもあった。歩いて伊勢神宮へ行こうと思うと江戸から片道15日間、大坂からでも5日間、名古屋からでも3日間、東北地方からも、九州からも参宮者が歩いて参拝していた。「一生に一度はお伊勢さん」と言われ、病気などで行けない人は飼い犬に代わりに参拝をさせるほどまでに信仰心が強く、国民が平和を望んでいたと思うと伊勢神宮がどれだけ神聖で、憧れの場所なのかが分かる。

2 式年遷宮の歴史

江戸時代のころから20年に1度ある式年遷宮の時は、身分から解放され自由になれるといわれていた。その式年遷宮は20年に1度、御正殿を始め御門・御垣などの御建物と御装束神宝の全てを新しくして、大御神様に新宮へお遷りいただき、国と国民の平和と発展を祈るわが国最大のお祭りだ。御装束神宝は714種、1576点ある。御装束神宝は、御装束と神宝に別けられる。御装束とは殿上や庭上を飾りたてる物をさし、大御神の衣服及びそれに関係する服飾品などがある。神宝は殿内に奉安する調度品をさし、紡績具、武具、馬具、楽器、文具、日常用具がある。式年遷宮の制度は、天武天皇のご発意により始まり、次の持統天皇四年(690)に第1回目が行われた。長い歴史の間には一時の中断もあったものの、これまで20年に一度、約1300年の長きにわたり繰り返し行われ、平成25年10月には62回目の遷宮が行われた。また、式年遷宮は平安時代の中期以降、朝廷が衰微して律令制度の

破綻が進むと「太神宮役夫工米の制」が制定され、全国にわたって定率の税を命じるようになった。それほど式年遷宮は重大な国家の大事業だということが分かり、この制度は室町時代に至るまで約 20 回の遷宮経費をまかなってきた。しかし、室町時代後期になると役夫工米による遷宮費の徴収が困難になり、約 120 年あまりの間中断せざるを得なくなった。そして安土・桃山時代になると織田信長・豊臣秀吉が遷宮費用を献納し、復興することができた。江戸時代に徳川將軍家に受け継がれ、造宮奉行に命じて式年遷宮の全面的な協力にあたらせた。式年遷宮は皇家にとっても国民にとっても重要事項だと分かった。お伊勢参りが流行る前、もっと昔から歴史が続いていることが分かった。

3. 伊勢神宮参拝の変化

古くは、天照大御神という天皇家の祖先をまつり、国家の政治を祈る神聖な神社であった。そのことから、伊勢神宮は皇室の氏神として、一般人の参拝は禁止されていた。江戸時代以降は、一般にも解放され、伊勢参りを行う伊勢講が流行し、日本全国から参拝者を集めた。多い年には年間 500 万人以上が訪れたとされる。当時の人口が約 3000 万人であったことを考慮すると、人口の約 6 人に 1 人が伊勢神宮を訪れていたと考えられる。また東海道などの五街道が整備され、全国からの参拝が容易になったことも一因とされている。現在の多くの人がお伊勢参りついでに観光旅行というスタイルで伊勢神宮を訪れるが、これは一般開放された江戸の時期からすでに始まっていたといえる。式年遷宮の経済効果額について触れている記事によると、20 年ごとに大幅に参拝客が増加していることがわかっている。2013 年度時の消費支出額を予想した内訳についても、宿泊費や飲食費が高い比率を占めている。このことから、近年の伊勢神宮への参拝は宗教的な側面よりも、おかげ横丁などへの観光目的あるいは、参拝ついでに観光で訪れる人の方が多いと予測される。

4. 交通の変化

伊勢神宮が鎮座する「神都」として全国から参拝者が集まる三重県伊勢市には、最盛期の昭和初期に官民 3 本もの鉄道が存在した。その中の伊勢の市電、「神都電車」は明治 36 年 8 月 5 日に山田の本町と二見間に開通した。全国で 7 番目、三重県下では最初の出来事であった。明治 36 年～昭和 36 年までの 57 年間、参宮客や市民の足となって活躍し、車窓から眺める景色は「伊勢の風物詩」として新しい観光資源の創造に大きな役割を果たしていった。しかし、伊勢湾台風の影響により前線運休になってしまい、ようやく復旧したもののマイカー時代の到来により、観光ブームにも関わらず利用客は激減し、昭和 36 年 1 月 20 日に廃線となった。明治から昭和期は 3 本の路線で乗客を奪い合う時代であった。そこから現在までは交通網が多様化した。東海道新幹線が東京と大阪を結び、道路網も全国で整備されていく過程で伊勢参宮も変化した。平成 5 年に 61 回目の式年遷宮があった時、全線開通した伊勢自動車道を利用したマイカーや観光バスでの参拝客が増加した。とくにツアーバスは、内宮のみにお参りした後に伊勢鳥羽二見ラインで鳥羽方面へ抜けてしまうようになり、外宮の参拝者が減少するという現象が生じた。本来は外宮にお参りしてから内宮にお参りするのが順序である。25 年の第 62 回

式年遷宮では外宮周辺が再開発され、遷宮に関する情報発信基地として宮域内に「せんぐう館」も建



てられたので、外宮周辺に賑わいが戻った経緯がある。62 回目の遷宮では戦前より多い 1400 万人と過去最高の参拝者数を記録し、その次の年が 1000 万人、そこから 31 年まで 800 万～900 万人で推移した。コロナ禍で人の移動が激減したとはいえ、令和 3 年は 380 万人が神宮をお参りしている。これらの背景にあるのは神社ブームのみならず、新幹線のスピードアップや道路網整備といった高速交通体系の発達である。現在のバス停ではインバウンドが伸びていることもあり左の写真のようなバス停の時刻表を電子にし、外国人旅行者にも対応できるようになっている。このように昔は路面電車や、ロープウェイなどで観光客を移動させていたが現在ではバスや自家用車、タクシーでの移動が多いことが分かった。

4 まとめ、考察

江戸時代のあたりまでは伊勢神宮に観光として行くというよりは、一生に一度参拝をしに行くという宗教的な部分があったことが分かった。昔、お伊勢参りが流行っていたころは、徒歩で行っていた。それから時代が進み、伊勢に行く目的が観光としての意味合いが強くなるにつれて交通機関が普及してきたように見えた。公共交通機関が普及してからも進化は進み、初めは市電やケーブルカーが主であったがマイカーブームなどの影響を受けて自動車を使って移動する参拝客と、それに伴って発展した道路を利用した幅広い観光バスも続々と出てきた。伊勢神宮周辺は土地が豊富にあったため広い駐車場を準備できるため、電車でのアクセスが容易になっている今でも、自動車での参拝客が多いのであろうと思った。自動車のメリットとして好きなタイミングで行けて利便性が高まるが、交通面の方では渋滞や駐車場の問題というデメリットがありそこを解決していくことが今後の課題になっていくと思った。外国人観光客が増加してバスの需要が増加してからは、伊勢市駅前が発展してきた。グローバル化が進み、マイカーを持たない観光客が増えれば、さらに公共交通機関は進化していこうと思う。

参考文献

<https://www.j-cast.com/2013/10/03185381.html?p=all>

最終閲覧日 11 月 22 日 16 時 20 分

<https://www.isejingu.or.jp/sengu/senguhistory.html>

最終閲覧日 11 月 20 日 11 時 30 分

伊勢フィールドワークレポート ～美術の面からの式年遷宮～

① はじめに

伊勢神宮と言えば国内・国外から多くの観光客が訪れる東海地方有数の観光地である。今回のフィールドワークでは伊勢神宮、そして神宮徴古館・美術館を訪れた。なかでも、美術館では多く作品に触れ、式年遷宮を美術の観点から深堀したいと感じたため、このレポートテーマを選んだ。



② 式年遷宮とは

式年遷宮の「式年」とは定められた年を、「遷宮」とは宮を遷すことを意味する。式年遷宮は20年に一度、東と西に並ぶ宮処を改め、古例のままにご社殿や御装束神宝(正殿の内外をお飾りする品々や、武具、馬具、楽器などの調度品)をはじめ全てを新しくして、大御神にお遷りいただく祭りである。式年遷宮の制度は、天武天皇の発意により始まり、次の持統天皇4年(690)に第1回が行われた。長い歴史の間には一時の中断(室町時代後期に式年遷宮の造営費用として諸国の公領・荘園に課された臨時課税である役夫工米の徴収が困難になり、120年中断された)はあったが、これまで20年に一度、約1300年の長きにわたり繰り返し行われており、今回は2033年に予定されている。

20年に一度式年遷宮を行うことは『皇太神宮儀式帳』に「常に二十箇年を限りて一度、新宮に遷し奉る」、『延喜太神宮式』に「凡太神宮は廿年に一度、正殿宝殿及び外幣殿を造り替えよ」と記載があるが、その理由についてはいずれの書籍にも記載がなく、様々な理由が推定されている。20年一度式年遷宮が行われてきたことにより神明造という建築技術や御装束神宝などの調度品を現在に伝えることができた。式年遷宮が20年に一度行われる理由には、檜と萱が美しい姿を保つことのできる年数が20年だから・宮大工などの伝統技術伝承が可能な年限が20年・遷宮を行うための費用に充てられる稲の貯蔵年限を20年とする法令があったから、といった理由が挙げられる。

③ 式年遷宮に関する美術作品

神宮美術館には、神宮式年遷宮を奉賛し文化勲章受章者・文化功労者・日本芸術院会員・重要無形文化財保持者（人間国宝）から献納頂いた国の重要文化財 11 点を始め、歴史・考古・美術工芸品など約 13000 点を収蔵・展示している。そのなかで式年遷宮に関連する 3 つの作品を紹介したいと思う。

1 点目は、徳川幕府の將軍奉納刀である。將軍奉納刀とは式年遷宮奉祝や將軍就任報告の際に奉獻された刀劍のことで、徳川家康は神宮尊崇の念が強かったため、歴代の徳川將軍は代参として神宮に家臣を遣わして、刀劍や馬などを奉納していた。また、徳川幕府は式年遷宮など、いにしへの祭儀を再興するための探究や考察に積極的に取り組んでおり、その 1 つが將軍奉納刀の奉獻であったと考えられる。実際に徳川將軍家が造営奉行に命じて式年遷宮の全面的な協力にあたらせたという記録も残っており、徳川將軍家の神宮尊崇の念を感じることができる。

2 点目は、皇太神宮儀式帳である。これは延暦 23 年（804）に、宮司大中臣真継らが神祇官に提出した上申文書で、祭儀、鎮座の由来などが記されている。

3 点目は、平安時代中期に編集された古代法典である延喜太神宮式だ。巻四には神宮のことが記されている。

また、彫刻では富永直樹氏作の藤原俊成卿之像が一際目立っていた。縦 140 c m 幅 51 c m 奥行 76 c m の金色の像である。藤原氏は、平安時代末期に「神風や五十鈴の川の宮ばしら幾千代すめとたてはじめけむ」という和歌を詠んだことが新古今和歌集に記されている。この歌は 2000 年前の伊勢神宮の創建を通して、永遠に続く日本の状態を讃えたもので、伊勢神宮とのつながりを感じ取ることができる。朝廷と幕府が衰退した戦国時代には、式年遷宮が続けられなくなった。その中で織田信長、豊臣秀吉により社会情勢が安定し、遷宮費の奉納、神領地の寄進が行われた事が、絵画に描かれていた。他にも、伊藤龍涯作の「天照大神」や、狩野探道作の「天孫降臨」など天照大神を描いた絵画が多かった。実際に神宮の博物館に足を運んでみて、美術館では美術・工芸家から奉納された作品、徴古館では、神宮のお祭りや社殿建築にする資料を見学し、実際に参拝するだけでは知りえない神宮の歴史や壮大さ、伝統などを知ることができた。

④ 復興材としての美術

前段落でも述べたように、式年遷宮は国内情勢悪化に伴い、何度か中断されている。20 年という一つの区切りごとに、すべてを新しくすることによって神が若返り、より強い力で保護してくれることを信じ祈る行為だとも考えられ、神宮の最も重要な行事とされている。しかし、これだけ重要な行事ではあっても、南北朝の動乱期にはその制は崩れ、室町時代には 120 年以上にもわたって遷宮が行われなかったという事態に直面した。当然、建物の荒れ様はひどく、神主たちはその後実権を握った織田信長に両宮造営を願い出た。これに応じて、信長

は社殿の造営費用を寄進し遷宮実現に尽力したが、本能寺の変において倒れ頓挫した。だが、信長の意志を継いだ豊臣秀吉によって天正13年の両宮式年遷宮は実現された。江戸時代には徳川幕府が費用を負担し、20年に一度の式年遷宮が執り行われ、以後順調に遷宮が続けられてきたが、第二次世界大戦後の昭和24年の第59回式年遷宮は、戦災復興のさ中であり、昭和28年に延期された。

終戦後、式年遷宮復興を願う人は多く、戦後の復興には美術が深く関わっている。横山大観はその中の1人であり、昭和天皇が中止された式年遷宮を執り行う為に設けられた「伊勢神宮式年遷宮奉賛会」に協賛し、神宮式年遷宮奉賛総合美術展覧会へ富士を描いた「国破山河在」を出品し、昭和28年第59回神宮式年遷宮の斎行に貢献した。昭和20年に一旦終わった式年遷宮は、横山大観などの多くの著名人が、自らの作品を売ってもいいから再開してほしいと願い、売却して得た何千万使って立て直しが進められた。他にも有名な人の作品が、美術館には名前を伏せて奉ってある作品もあるという。式年遷宮と美術はそこまで関係はないと思っていたが、式年遷宮復活には大観のような日本人の美意識が強く反映されていると感じた。

⑤ 式年遷宮の戦前と戦後の違い

会員種別及び奉賛金額	祭典等の案内	発行参宮章と有効期限	参拝位置	感謝状・記念品等
協賛員(千円以上)	無し	特別参宮章付絵葉書(1回)	外玉垣南御門内	無し
三級賛助会員(五千円以上)	無し	白色の特別参宮章(1回)	外玉垣南御門内	式年遷宮記念絵葉書セット
二級賛助会員(一万円以上)	無し	黄色の特別参宮章(平成28年まで有効)	外玉垣南御門内	感謝状、扇子、広報誌
一級賛助会員(五万円以上)	無し	黄色の特別参宮章(平成28年まで有効)	外玉垣南御門内	感謝状、扇子、広報誌
三級有効会員(十万円以上)	奉祝祭	青色の特別参宮章(平成30年まで有効)	中重御鳥居際	感謝状、卓布(小)、広報誌
二級有効会員(五十万円以上)	奉祝祭	青色の特別参宮章(平成30年まで有効)	中重御鳥居際	感謝状、卓布(小)、広報誌
一級有効会員(百万円以上)	奉祝祭	赤色・錦ケースの特別参宮章(平成35年まで有効)	内玉垣南御門外	感謝状、卓布(大)、広報誌
特別会員(二百万円以上)	遷宮祭・奉祝祭	赤色・錦ケースの特別参宮章(平成35年まで有効)	内玉垣南御門外	感謝状、卓布(大)、広報誌
名誉会員(五百万円以上)	遷宮祭・奉祝祭	赤色・錦ケースの特別参宮章(平成40年まで有効)	内玉垣南御門外	感謝状、卓布(大)、広報誌
特別名誉会員(一千万円以上)	遷宮祭・奉祝祭	赤色・錦ケースの特別参宮章(平成45年まで有効)	内玉垣南御門外	感謝状、卓布(大)、広報誌

表1 式年遷宮奉賛金待遇一覧表

戦前の式年遷宮は国を挙げての最大の祭りであったため国からお金が出ていたが、戦後は政府

と神宮の関係が断たれたため、第62回式年遷宮のように、かかった約550億円の費用のうち、3分の1程度が募財されるなど国民の浄財によって行われた。神宮大宮司を総裁とする「神宮式年造営庁」が神宮司庁内におかれ、有識者からなる大宮司の諮問機関「遷宮委員会」の設置、「(財)伊勢神宮式年遷宮奉賛会」が結成され、各都道府県においてもの地区本部が組織化された。これらの組織は、式年遷宮実施日が近づくと、全国の神社で奉賛金を募る募金活動を行う。奉賛金の額によってもらえる品や祭典等の案内、特別参拝の参拝位置が異ってくる。表1の通りである。

また、戦国から現在にかけて新たな課題も生じている。式年遷宮には約800種1600点の御装束・神宝を古式により新しく作り供えるという決まりが、平安時代に定められ、その時代の最高の刀工、金工、漆工などの美術工芸家に調整を依頼している。しかし、材料の入手が困難であったり、伝統技法の継承者の減少が起きており、少子高齢化や後継者不足などの社会問題は式年遷宮にまで影響を与えていることが分かった。

⑤まとめ

今回のフィールドワークで神宮の美術館に行ったことで、式年遷宮と美術の繋がりを知ることができた。神宮の所有する美術品は、当時の美術を保存して後世に残していくだけでなく、式年遷宮の費用面でも重要な役割があることを知った。数々の芸術家が寄贈してくれた作品は、現在は売ることなく美術館に貯蔵されているが、己の作品を売ってでも式年遷宮を行ってほしいという芸術家たちの意識によって、式年遷宮は現在まで続いていると感じた。また、式年遷宮の際に毎回新しく作られるお供えの美術工芸品は、今まで古いものは焼くか埋めるかしていたそうだが、現在は蔵に納められ、定期的に美術館で公開されている。伝統技能の維持・継承が課題となる工芸品産業においても神宮の美術館で作品を保存していくことは重要であり、今後の式年遷宮を続けていくためにも美術工芸品の貯蔵には意義があると考ええる。

伊勢神宮は観光地として発展し、内宮・外宮、おかげ横丁に観光客が集まっているが、神宮徴古館・美術館にはそれほど観光客はいないようだった。式年遷宮を支える寄贈された美術品や今後も継承していかなければならない伝統工芸品に触れることができる美術館により人が集まり、式年遷宮や伝統工芸品に対する関心が高まるとよいと考える。

【参考文献】

[神社ものしり辞典 \(fukushima-jinjacho.or.jp\)](http://fukushima-jinjacho.or.jp)

<https://fukushima-jinjacho.or.jp/monoshiri/pc/section13.html>

最終閲覧日 11月20日 10時1分

[式年遷宮と神棚 \(montclim.com\)](http://montclim.com)

http://montclim.com/jingu/7_senguu-kamidana/senguu-kamidana.html

最終閲覧日 11月20日 10時30分

[神宮徴古館・農業館について | 神宮の博物館 \(isejingu.or.jp\)](http://isejingu.or.jp)

<https://museum.isejingu.or.jp/museum/index.html>

最終閲覧日 11月22日 21時19分



交通網の発達と人の行き来

清原匠真 萩野元則

橋本翔汰 毛利駿介

1.伊勢神宮とは

三重県伊勢市にある伊勢神宮。正式名称は単に「神宮」だが、他の神宮と区別するために伊勢神宮という呼び方が定着している。また親しみを込めて「お伊勢さん」「大神宮さん」と称されることもあるが、全国に約8万箇所ある神社の総本社に当たる。全国的にも有名な観光スポットになっている伊勢神宮だが、本来は皇室や朝廷との関係が強く、天皇や内閣総理大臣といった権威者が参拝することが慣習になっている。祭られている祭神は「天照坐皇大御神（あまてらしますすめおおみかみ）」と衣食住の神「豊受大御神（とようけのおおみかみ）」の二つの神である。

2.伊勢神宮の誕生

伊勢神宮が誕生するきっかけは崇神天皇の時代までさかのぼる。紀元前93年に疫病が流行した際、人口の半分が失われこの疫病が当時祭られていた天照大御神と倭大国魂（やまのおおくにたまのかみ）が原因だと考え崇神天皇は宮の外に出すことを決めた。天照大御神は笠縫邑に祭られ疫病は収まった。その後『日本書紀』によると、紀元前5年当時神事を担当していた倭姫命は永遠に天照大御神を祀るにふさわしい場所を求めて現在の東海地方各地を漫遊。最終的にたどり着いた場所こそが伊勢であった。天照大御神が鎮座し内宮ができた。そして500年後の478年に雄略天皇が、自分一人では安らかに食事が取れないので、そのお供として丹波国与謝郡から豊受大御神を呼び寄せるよう神託を天照大御神から受けて外宮ができた。

3.伊勢神宮の変化

古代の伊勢神宮は皇室の祖先神であったため、一般庶民や貴族であっても個人的な参拝は許されておらず、このような背景から一般庶民にとって伊勢神宮に参拝することは、他の神社に参拝することとは価値が異なっていた。律令制が衰退し一般の寺社参詣の影響を受け、平安時代には上級武士層、鎌倉時代中期には御家人や地頭級の武士層と徐々に信仰が広がっていった。しかし全国的に見るとそ

れほど広くは広がらなかった。室町時代に戦乱の影響もあり神宮が財政危機に陥り、従来はそこまで力が入れられていなかった宿泊や観光案内の提供など観光的な取り組みも行うようになった。これにより庶民の参詣へのハードルは多少下がったものの、当時は交通網が整っておらずさらには戦国時代に入ったため一時衰退してしまった。

4. 江戸時代

江戸時代では、江戸幕府が全国の街道を整備し治安が改善され、「お陰参り」と呼ばれる、江戸時代に数回起きた熱狂的な参詣ブームがおきた。弥次郎兵衛と喜多八のお伊勢参り珍道中が描かれた十返舎一九の『東海道中膝栗毛』が大ヒットしたことも後押しになった。



『伊勢神宮 宮川の渡し』 歌川広重

「伊勢神宮へのお陰参り」について

お陰参りにかかる時間

長い人は約3か月ほどかかった人もいた。物理的にも経済的にも、人生に一度きりの大旅行という覚悟で出かけた人が多かったため、伊勢神宮をひたすら目指して歩き、参拝後はそのまま国に帰るよりも、道中にある観光名所やさまざまな寺社に立ち寄りながら、時間をかける人が多かった。

かかった金額

食費、宿泊費、交通費、娯楽費、お土産代等で、お陰参りには約2か月で60万円。庶民にとっては相当な負担であったため、村ごとに伊勢講という団体を作り、みんなで積み立てたお金で代表者が参拝に行くという仕組みもあった。

ピーク時の参詣者数

約60年に一度、伊勢参りが大流行する現象があった。全国からの民衆が集団を組み、伊勢神宮へ参詣した。特に幕末（1830年頃）には、参詣者は半年間に約460万人まで多くなったといわれ、当時では日本人の6人に1人が伊勢神宮にお参りした計算になる。

5. 明治時代

明治時代になると「お陰参り」の方法も変化を遂げる。江戸時代には五街道や船などの交通網が発達したが明治時代になると鉄道が発達した。物流王手・日本運輸の前身である内国運輸は明治5年に飛脚のグループを取りまとめて「真誠講」という旅館の組織を作り、これがツアーリストビューローとしての役割を果たした。真誠講は伊勢神宮の講社組織であった神風講社とも協力関係を結ぶが、物資運搬だけではなく旅行者やその荷物を運び、宿の手配、旅のアドバイスも行っていた。

伊勢初の鉄道は大阪からの関西鉄道（現在の JR 関西本線）から南下する参宮鉄道（JR 紀勢本線、参宮線）で、明治30年に山田駅（JR 伊勢市駅）まで開通した。殖産興業や富国強兵のために作られた鉄道だが、伊勢との関係となると20年に一度の式年遷宮が大きく関わっているということがいえる。明治22年に行われた第56回式年遷宮後の29年、伊勢神宮の御鎮座1900年に合わせて日本鉄道、両毛鉄道、青梅鉄道、総武鉄道、武甲鉄道などをはじめとした各鉄道会社で「鉄道で神宮にお参りするなら運賃を割引する」といったサービスが出現するなど、20年代から30年代に鉄道を使った参宮が盛んになった。

また、伊勢神宮と鉄道を象徴するものの一つとして修学旅行がある。伊勢初の路線となった参宮鉄道の全線開通からわずか15年後の明治45年に京都府の第一高等女学校が行ったと記録が残されている。



6. 近代（昭和～現在）

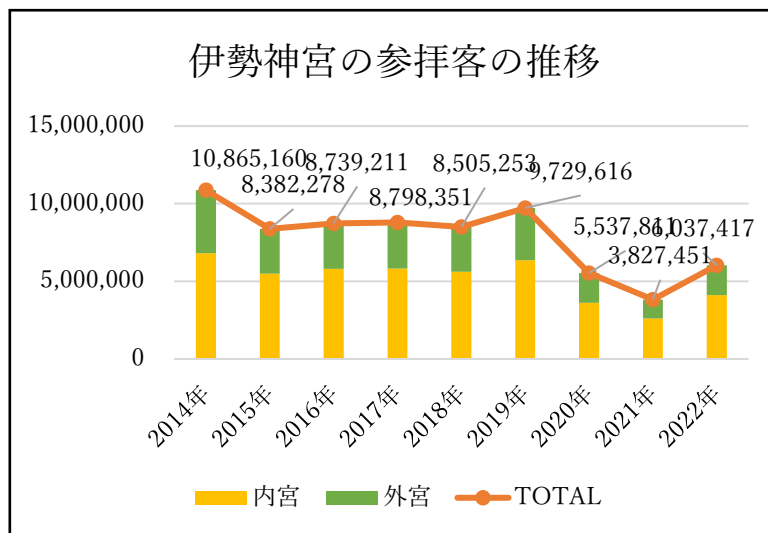
1929年の第58回式年遷宮をきっかけに翌年、大阪電気鉄道（現：近畿日本鉄道）奈良の桜井駅から宇治山田駅まで延伸した。宇治山田駅は1931年に開催された「御遷宮奉祝神都博覧会」の際に移築された神都公会堂の跡地に建てられた駅です。現在は地元のローカル鉄道である伊勢電気鉄道も外宮に隣接する大神宮前駅（現：廃駅）まで開通させたことで、国や政府によって敷設された官設鉄道を含め3本の路線で乗客の競合をする時代になった。伊勢神宮への玄関口が3駅になったことで「大阪から伊勢まで2時間」というキャッチコピーのようなもので誘客が活発化した。3路線競合で利便性やサービス向上も図られたこともあつ

て乗客の急増を招くことができた。近代化していくにつれて「伊勢神宮」への参宮形態も変化していった。1994年に61回目の式年遷宮の時、伊勢自動車道が全線開通したことによって自家用車や観光バスでの参拝客が増加した。2014年の62回目の式年遷宮では外宮周辺が再開発され賑わいが戻った経緯がある。左のグラフは、2014年～2022年の参拝客数の推移を表したものだ。コロナ禍前までは、どの年も800

万人を超えていたが2020年以降は例年に比べると少ないがコロナの規制緩和も行われているので徐々に上昇傾向になっている。

このように、伊勢には天照大御神などの神が祀られて

いる「伊勢神宮」という日本随一の聖地があり、これを式年遷宮ごとにコンテンツ化してきたことが伊勢の鉄道・交通網発展の歴史といえる。



7.まとめ、考察

いまでこそ観光名所となっている伊勢神宮は、本来皇室や朝廷との関係が強く一般の参詣は禁じられていた。しかし戦乱の世の前後で神宮を庇護していた朝廷の力が弱まり、さらに一般の寺社参詣の影響もあり庶民なども来るようになり観光的な取り組みも増えた。そして、江戸時代に五街道が開通した影響もありお陰参りがブームになり参拝する人が大幅に増えた。明治時代から現代にかけて神宮の周りそして全国に鉄道が広がったため、伊勢神宮へのアクセスは容易になっていき2014年には108万人もの参拝客が来るまでに至った。ここまでの地位に至った要因として権力者の庇護下にあったことが一番大きかったと考える。古くから朝廷などに資金援助をしてもらい、近代、現代では神宮に行きやすいように交通網が整備された。上流階級の人間が信仰しているのも特別感を庶民に与えあこがれる場所になっていた。それにより一般の客が増えたことで神宮が発展していったことを考えると、どの時代の権力者も信仰に厚かったことは神宮にとって大きなことだったと考える。

参考文献

[【10分でわかる】お伊勢参りとは？歴史や目的・理由をわかりやすく解説 - ノミチ \(nomichi.me\)](#)

[伊勢神宮とは？いつ、どこで、誰に、何のために作られた？【歴史や参拝方法、歩き方、年表も紹介】 - レキシル \[Rekisiru\]](#)

<https://discoverjapan-web.com/article/38423>

[伊勢神宮でひもとく信仰と鉄道の近代史（上） - 國學院大學 \(kokugakuin.ac.jp\)](#)、更新日：2022/05/30、最終閲覧日：2023/11/20

[伊勢神宮でひもとく信仰と鉄道の近代史（下） - 國學院大學 \(kokugakuin.ac.jp\)](#)、更新日：2022/05/20、最終閲覧日：2023/11/20

[伊勢神宮、2022 年年間参拝者数 600 万人超え 一昨年よりも増加 - 伊勢志摩経済新聞 \(keizai.biz\)](#)、更新日：2023/01/01、最終閲覧日：2023/11/21

伊勢神宮における祭典と農業

<はじめに>

今回のフィールドワークで神宮農業館に行った際、伊勢神宮の周辺での農業の発展の様子を学んだ。その中で伊勢神宮の祭りが農業と深く関係があるように感じたため調べてみることにした。



<祭りについて>

伊勢神宮で行われる祭典は年間で1500回以上に及び、伊勢神宮で執り行われている神嘗祭や新嘗祭、祈年祭などお祭りについて取り上げていく。神嘗祭は、国家の安泰や国民の幸せを祈る宮中祭祀の1つであり、その年に収穫された新穀を天照大御神にお供えし、その年の恵みに感謝するというものである。また6月・12月に行われる月次祭と共に「三節祭」と呼ばれ、恒例のお祭りの中でも特に重要な祭儀として位置づけられている。さらに神宮では、他の神饌（お供え物）と同様にお米も清浄に栽培・自給しており、このお米を栽培している田んぼが「神宮神田」である。伊勢市楠部町の神田では五十鈴川の水を引き入れ、粳米やもち米を栽培しており、凶作に備え、



確実にお米を調達できるように様々な品種が栽培されている。この神宮神田では毎年、4月初旬に「神田下種祭」と呼ばれる耕作の準備や、お供えする米や酒を作るための忌種を蒔くお祭りが行われ、9月上旬には成熟

した稲穂を忌鎌で刈り取り収穫する「抜穂祭」が行われている。このような神宮神田で行われる神田下種祭や抜穂祭は、毎年10月に行われる神嘗祭に付属したお祭りで、この他にも御酒殿祭や御塩殿祭、大祓など1年中様々なお祭りが行われている。そしてこの神嘗祭が伊勢神宮で行われる理由として、内宮や皇大神宮に祀られている天照大御神の存在が関係している。天照大御神は稲作に必要な太陽など生命の源ともいえる神であり、また天皇陛下の祖先の神であるため日本の総氏神とされているからである。

次に新嘗祭は「しんじょうさい」とも呼ばれ、「新」は新穀を「嘗」はお召し上がり頂くということを意味し、この新嘗祭も収穫された新穀を神に奉り、その恵みに感謝をし、国家の安泰や国民の繁栄を祈るお祭りである。現在このお祭りは毎年11月23日に宮中を始め、日本全国の神社で行われている。収穫感謝のお祭りが11月下旬に行われる理由は全国各地での収穫が終了する時期に、御親祭が行われていたためだと考えられている。神宮では神嘗

祭で新穀が奉られるため、新嘗祭はなかったが、明治 5 年に勅使が差遣されて行われたのが始まりである。神嘗祭と新嘗祭はどちらも穀物を奉る行事であるため、混同してしまうが、神嘗祭は穀物を天照大御神に捧げる儀式であるのに対し、新嘗祭は新穀を捧げた上で天皇陛下が自らも食すという行事である。

祈年祭は春の耕作始めにあたり、五穀豊穰を祈るお祭りで、「としごいのまつり」とも呼ばれている。「とし」とは稲の美称であり、「こい」は祈りや願いで、お米を始めとする五穀の豊かな稔りを祈ることを意味する。生活の基盤ともなるお米の出来は、国の豊かな生活と繁栄に繋がるものであるため、この祈年祭は伊勢神宮だけでなく全国の神社で行われている。この伊勢神宮でも外宮と内宮のそれぞれに神饌を供え、豊作を願う「大御饌の儀」と天皇陛下の使いである勅使により幣帛が奉られる「奉幣の儀」が執り行われている。

<御料地について>

伊勢神宮ではこれらの多くのお祭りがあるが、そのお祭りなどで神様に供えられる食べ物を御料という。また、それらの食べ物を調達する場所のことを御料地と呼ぶ。ここでは、その御料地についてまとめる。

神宮には神田と御園があり、それぞれ三重県伊勢市楠部町、三重県伊勢市二見町溝口に定められており、そこでは神様にお供えする御料を育てている。御料は、朝夕の 1 日 2 食であり、ご飯・塩・水・乾いた鰹・魚・海藻・野菜・果物が決まってお供えされる。御料に使われる土器も神宮で作られている。土器は多気郡明和町蓑村で作られており、現在でも年間 60000 個ほどが作られている。

神宮神田は、2000 年前に倭姫命によって定められたとされている。神田では、五十鈴川の水を使ってお米が育てられている。多くの品種のお米を育てることで、田植えの時期を分散し、天候不順などによる不作の被害を最小限にしている。御園では、季節に応じておよそ 50 品目の野菜や果物が育てられている。御料の土器は大きさが決められており、その大きさに合った野菜や果物を育てなければならず、細心の注意が払われている。

御塩は、お供え物として捧げられるだけでなく、お祭り前のお清めの塩としても用いられ、欠かせないものだった。神宮では五十鈴川の河口近く、二見浦で御塩を作っているが、これは内宮御鎮座当時に倭姫命がお定めになったと伝えられている。神宮の御塩は、国土の四方が海に囲まれていることを活かし、海水から採取したものが主流だった。神宮では昔ながらの入浜式塩田法を用いて作られているが、その工程は 1.採鹹作業、2.荒塩作り、3.御塩焼固の三つに分けられる。

1.採鹹作業

毎年 7 月下旬の土用の頃、御塩浜で鹹水と呼ばれる高濃度の塩水を採取する。御塩浜は海水と淡水が混じる場所にあり、その理由は海水に少し淡水が和合した方が良い塩ができる

ことによる。鹹水は約1週間かけて採取される。

2.荒塩作り

採取された鹹水は御塩汲入所に運び、すぐ隣にある御塩焼所において鉄の平釜で炊き上げて荒塩にする。この作業は交代で火を焚き続けながら、一昼夜かけて行われる。

3.御塩焼固

毎年10月5日に御塩殿神社において御塩殿祭が行われる。そこでは、御塩焼固の安全と日本の塩業の発展が祈念され、その後5日間にわたって焼固が行われる。荒塩は御塩殿で三角錐の土器につめて焼き固め、堅塩に仕上げる。御塩焼固は10月と3月の二度行われている。

鰯は、三重県鳥羽市国崎町が御料地となっている。2000年前に倭姫命が伊勢を回っている時に国崎のおべんという海人が鰯を差し出し、そのおいしさに感動し伊勢神宮に献上するように命じたことが起源とされている。国崎の鎧崎に木造平屋建ての調製所があり、ここでは潔斎場と呼ばれる身を清める場所があり、作業は清浄を期して行われる。毎年6月から8月にかけて作業が行われ、一つ一つ薄く切った鰯を干して、伝統的な手法を守りながら、身取鰯、玉貫鰯が作られている。

鯛はお祭りにお供えされる神饌の中でも、とりわけ大切なものの一つである。神饌とは主食の米に加え、酒、海の幸、山の幸、その季節に採れる旬の野菜など、神様へお供えされる食事のことである。干鯛の御料地は愛知県知多郡知多町大字篠島生に定められ、鯛の内臓を取り除き、塩水につけた後、晴天の日に2日間ほど乾燥させ作る。平安時代の天皇の食膳品目にも見ることができる。

神宮では篠島で伝統と由緒のままに調製された干鯛が、神宮のもっとも重要なお祭りである、三節祭と呼ばれる大切なお祭りにお供えされる。

<まとめ・考察>

神嘗祭や新嘗祭、祈年祭など、それぞれの祭りが農耕や自然への国家繁栄を表現していると分かった。特に神宮神田で行われる神田下種祭や抜穂祭は季節ごとの農作業が祭りと結びついている点が印象的だった。神宮の御料地や御料として供えられる食べ物も、土器から野菜、果物、鰹、鯛まで、神聖な場で作られ、祭りにおいて神に捧げられることが、日本の文化や宗教と密接に結びついていると伺える。このような祭りや御料の伝統が、日本の歴史や文化を今もつないでいて、今も多くの人が伊勢神宮を訪れる理由の一端なのではないかと思います。



桐山・磯貝・熊谷・山本・原山

<参考文献>

<https://www.google.com/gasearch?q=%E4%BC%8A%E5%8B%A2%E7%A5%9E%E5%AE%E3%80%80%E7%A5%88%E5%B9%B4%E7%A5%AD&source=sh/x/gm2/5>

伊勢神宮、祈年祭・新嘗祭、閲覧日 11 月 20 日

伊勢神宮と宗教について

寺本・川瀬・三輪・真瀬

1. はじめに

私たちが今回のフィールドワークにおいて注目したのは伊勢神宮と宗教との関係性である。伊勢神宮は八百万の神々の中心に位置し私たち人間の大神として崇拝されている天照大神がお祀りされており日本宗教の中心地とされている。また信仰している宗教は神道でありそれに伴った行事が年に1500回行われていることから私たちはこの天照大神を中心とした神道がどのような宗教であり、神嘗祭をはじめとした宗教行事が伊勢神宮と周辺地域にどのような影響を与え関わっているのか農業、観光業とも絡ませながら調べてみることにした。



2. 神道とは

神道とは日本の宗教の1つであり天照大神をトップとした民俗宗教である。特徴としては動物や植物その他生命のない川や岩などにも神が宿っていると考えるアニミズム的なもので、2、3の教派を別にすれば教祖を持たない自然発生的宗教で主に日本で生まれ、日本人の生活習慣に浸透し大きな影響を与えた独自の宗教である。

また仏教と同じと考えている人も多いが仏教はインド発祥の世界三大宗教の1つで教祖であるお釈迦の教えを大切に考え修行を行うことで悟りを開くことを目的としているのに対して神道は日本発祥の民俗宗教で特定の教祖や教えを持たず八百万もの神々を信仰するという違いがある。

3. 伊勢神宮と神道

先にも述べたが伊勢神宮では神道の最高神である天照大神をお祀りしており、それに関わる神宮恒例のお祭りが1年間で1500回も行われている。その中でも最も大切なのが10月に行われる神嘗祭だ。神嘗祭とは宵と暁の2度に渡ってその年収穫された新穀を最初に天照大神に捧げることで豊作の感謝と皇室、国家の繁栄を祈る祭りで新穀、海の幸、山の幸、お酒などが捧げられる。そして10月17日の正午には天皇陛下が遣われた勅使が神々への捧げものの総称である幣帛をご奉納になる奉幣が行われる。このように諸神に先立って天照大神に感謝と祈りを捧げる神嘗祭が伊勢神宮の中で最も重要とされている祭りなのである。

4. お伊勢参り・神嘗祭

伊勢神宮には、2022年の1年間で600万人以上が参拝に訪れた。特に参拝者が集中するのが初詣の時期である。今年の正月の三が日には内宮と外宮を合わせて、37万人以上が伊勢神宮を参拝した。伊勢神宮は、多くの人々が参拝に訪れる日本有数の神社である。伊勢神宮は天照大神を祀っており、神道の中でも最も重要な宮とされている。そのため、古くから日本全国の人々が参拝に訪れている。江戸時代には、「お伊勢参り」と呼ばれる伊勢神宮を目的地として、参拝者が遠方からひたすら歩いてくる旅行が流行した。特に1829年の式年遷宮の翌年には、半年未満の間に約460万人が伊勢神宮を訪れたという記録も残っている。「お伊勢参り」の道中で他の観光地によりながら旅をつづけた人がいたこともあり、伊勢神宮の周りにはおかげ横丁をはじめとした観光地や、いくつかの宿泊施設が発展した。そして、伊勢市の地域一帯が観光地化していった。そして、伊勢神宮へのお参りが目的ではなく、おかげ横丁等への観光を目的に訪れる人も増えていった。また、伊勢神宮の海外での知名度も上昇し、外国人の観光客も増加している。外国人観光客は新型コロナウイルスの流行により、一度減少したものの、2022年には18,000人が伊勢神宮へ訪れ、前年よりも約10,000人増加している。伊勢神宮は観光地として発展を遂げていき、それとともに赤福や伊勢うどんをはじめとしたものが伊勢名物として名を広め、今では購入するために行列ができるほど多くの人々に親しまれている。特に赤福はお土産として多くの人々に人気であり、日本で最も売れているお土産ともいわれている。伊勢神宮が観光地として注目を集めるものに、内宮や外宮で行われるお祭りもある。伊勢神宮では年間約1500回のお祭りが行われるが、その年間行事の中で最も重要といわれているのが、10月15～25日の間に行われる「神嘗祭」である。「神嘗祭」とは、新穀をはじめとする山海の幸をお供えするとともに、天皇陛下が勅使を差遣して、幣帛を奉り、国家の繁栄と国民の平安を祈念する最重儀のお祭りである。このお祭りは6月・12月に行われる「月次祭」とともに「三節祭」と呼ばれている。特に「神嘗祭」の行われている期間は、お祭りの様子を見るために普段より参拝に訪れる人が増加するため、伊勢神宮の周辺は混雑になる。「神嘗祭」の行われた今年の10月の参拝者数は52万人であった。9月は44万人、8月は48万人であり、それらを上回った参拝者数であった。伊勢神宮は、1年中参拝に訪れる人が絶えないが、観光地として発展を遂げたことや毎年行われているお祭りが、参拝者数増加の一因となっている。



5. 食と宗教文化・祭りの関連性について

伊勢神宮では1年に1500回もの祭りが行われる。その中でも最も大切な祭りは十月に行われる神嘗祭という祭りである。この祭りでは宵と暁の二度に渡りその年に収穫された新穀を外宮で奉られている豊受大御神と呼ばれる神に捧げ、豊作の感謝と皇室、国家の益々の繁栄を祈る。捧げられるものは新穀のみではなく、海の幸、山の幸をはじめ四種の御神酒なども捧げられる。この特別な祭りの日以外でも神饌と呼ばれる神にささげる食べ物は供えられる。1500年間もの間1年365日一日も欠かすことなく外宮では朝夕二度の神饌をお供えする祭りが行われている。現在ではご飯、塩、水、鰹節、鯛などの魚類（季節により供えられるものは変わる）、海藻類、野菜、果物、酒など新鮮なものが供えられている。しかし、交通が不便で食物の保存がきかなかった時代には、お供えするものは水・飯・塩が主たるものであり、他に贅とされるのは、神宮に所属する神戸などから調達された魚、貝類、野菜で、これらは入手できたときに限りお供えしていた。

神嘗祭を中心として年間1500回に及ぶ祭りを滞りなく行うために、神宮神田、神宮御園、御塩浜などの御料地（神へのお供え物を調達する場所）があり、神様に捧げられる品々は古儀を尊重して清浄に調整される。神宮神田では米、神宮御園では野菜や果物、御塩浜ではその名前の通りに塩作りを行っている。御料地の歴史は古く、2000年ほど前に倭姫命がお定めになったとされている。

伊勢神宮で奉納されるバリエーション豊富な食は現在でも見て取れる。三重県の食文化は北勢、中南勢、伊勢志摩、伊賀、東紀州の5つの文化圏に分けることができ、その中でも伊勢神宮のある伊勢志摩ではリアス式海岸である事から、海の恵みを豊富に得ることができ、そのため漁業が盛んである。また、伊勢志摩の土地は海だけではなく陸地もとても肥沃で、尚且つ、晴天の日が多い地域でもある事から、海藻加工業者も多く、多様な海藻料理をいただくことができるそうだ。

このように、陸地でも海でも豊富な食材を得ることができる土地である伊勢は神にささげる神饌を調達するのにちょうどよい土地だったのではないかと考えられる。

6. まとめ

まず、伊勢神宮では年間1500回もの祭りが行われていることに非常に驚いた。私は基本毎年、伊勢神宮に一度は行って参拝しているのだが、これほど祭りが行われているとは流石に思っていなかった。毎日行事が数回行われているということで、伊勢神宮ではいかに、神様への崇拜、信仰が強く、古くから受け継がれてきたことが感じ取れた。特に神嘗祭が重要らしく、新穀を天照大御神に捧げてお恵みに感謝する祭りという。新穀だけではなく、海の幸、山の幸、御神酒なども捧げられるとのことだが、メインは米ということで、近年の米の余剰問題についてはこの祭りに関わる人々はどう思っているのかと正直気になった。また、観光地としても、一年中賑わっている伊勢神宮だが、神嘗祭の行われる際は、普段以上に参拝者が非常に増えることも魅力として大きい要因になっているだろう。

さらに、内宮の手前にあるおかげ横丁が伊勢神宮を観光の地として名を馳せる大きな要因になっていると私は思っている。横丁に入った瞬間から昔ながらの伊勢路の建物が並び、現代ではなかなか感じられない独特でどこか懐かしさのある雰囲気を味わえる。加えて約 50 の店が集結し、伝統料理のてこね寿司や伊勢うどん、さらには伊勢海老や松阪牛など、魅力あふれる飲食店を展開している。他にもお土産店や食博施設なども、伊勢神宮



がもたらす大きな恩恵を受けており、地域経済の活性化にもつながっているのだと考えられる。このように、伊勢神宮は、地域ならではの伝統を守り維持していく役割を持ちつつ、単なる宗教的な枠を超えて、周辺地域の文化的・経済的發展にも影響を与えている。

(参考資料)

・ 神宮「神宮の御料と御料地」 神宮司庁 閲覧日 11/21

<https://www.isejingu.or.jp/about/estate/>

・ うちの郷土料理 関西地方 三重県 農林水産省 閲覧日 11/21

https://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/k_ryouri/area_stories/mie.html